

ルカによる福音書22章1-23節 「苦しみの前の食事」

1A 人目を避けた殺害計画 1-6

2A 過越の食事の用意 7-13

3A 最後の食事 14-23

1B 身代わりの死 14-20

2B 親しい仲の裏切り 21-23

本文

ルカによる福音書 22 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 21 章まで来ましたが、今日は 22 章の前半部分、1 節から 23 節までを一節ずつ見て行きたいと思います。

1A 人目を避けた殺害計画 1-6

1 さて、過越の祭りと言われる、種なしパンの祭りが近づいていた。

私たちは、19 章からずっと一週間の出来事について学んでいます。イエスがエルサレムに入られたのは、日曜日のことです。それから、商売人を追い出し、宮の中で民衆を教えておられました。そして、過越の祭りと呼ばれる、種なしのパンの祝いが近づいていました。過越の祭りは、ニサン、またアビブとも呼ばれる月の 14 日に始まります。ユダヤ人の暦では、日没から一日が数えられるので、14 日の日没から種なしのパンの祝いが始まります。これが 15 日から七日間続きます。この2つは、ルカが記しているように、しばしば1つの祝いとして扱われます。

主は、イスラエルの民にエジプトからご自身が彼らを解放させた日としてとこしえに覚えていなさいと命じられていました。そして、過越の祭りと、七週の祭り(ペンテコステ)、そして、秋には仮庵の祭りとも呼ばれる収穫祭を、成年男子は必ず守るように命じられています(出エジプト 34:21-23)。ですから、今、続々とユダヤ人たちが離散の地からエルサレムに巡礼にやってきていて、そこから中の宿は一杯になっていて、テントを張って寝泊まりしている人たちもいました。

2 祭司長、律法学者たちは、イエスを殺すための良い方法を探していた。彼らは民を恐れていたのである。

イエス様が宮清めを行われて、宮で教え始められてから、ずっとこの方を殺す良い方法を探していました。けれども、19 章の最後に「何をしたらよいのか分からなかった。人々がみな、イエスのことばに熱心に耳を傾けていたからである。」とあります。それで数々の誘導尋問をしていましたが、イエス様は見事に完璧に答えられ、むしろ彼らのほうがイエス様から問いかけられる状況でした。

そして 21 章の最後には、ルカはこう書いています。「こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜は外に出てオリブという山で過ごされた。人々はみな朝早く、教えを聞こうとして、宮におられるイエスのもとにやって来た。」これだけ熱心に民が聞いていて、自分たちがイエスを捕らえるものなら、必ず自分たちは石で打ち殺されるか、民から酷い目に遭うことが分かっていました。

3 ところで、十二人の一人で、イスカリオテと呼ばれるユダに、サタンが入った。4 ユダは行って、祭司長たちや宮の守衛長たちと、どのようにしてイエスを彼らに引き渡すか相談した。5 彼らは喜んで、ユダに金を与える約束をした。6 ユダは承知し、群衆がいないときにイエスを彼らに引き渡そうと機会を狙っていた。

民によって、ある意味、守られていたイエス様が、仲間の裏切りに遭います。主が最も近く教え、共に時間を過ごし、多くのものをお任せになっていた十二使徒の中に、裏切る者が出てきたのです。イスカリオテと呼ばれるユダです。ユダであれば、イエス様が民から離れて独り、あるいは使徒たちだけで過ごしている時や場所をよく知っています。内通者です。それで神殿を管理している祭司長たち、そして実際の治安を担当している宮の守衛長に、どうやったら引き渡すことができるか相談しました。すると、祭司長たちは喜んで、そのための金も与えると約束しました。

ここに、これが「サタン」の仕業であることを、ルカは明確に書いています。イエス様の働きを根こそぎ壊そうとする仕業を、サタンはかつても行いました。ヨルダン川でバプテスマを受けられた後です。そこでは、天が開け、そこから「3:22 あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」との声が出て、また「聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。」ともあります。三位一体の神が関わっておられる中で、それを分裂させるかのような仕業を、悪魔が行いました。「4:3 あなたが神の子なら、この石に、パンになるように命じなさい。」であるとか、父と子との関係を切るような唆しを行いました。

神のご計画、またその働きを壊そうとするのに、サタンは、仲間の輪を壊すということがあります。それが最も衝撃を与えることができ、裏切りを使ってサタンは私たちをふるいにかけてしようとします。

2A 過越の食事の用意 7-13

7 過越の子羊が屠られる、種なしパンの祭りの日が来た。8 イエスは、「過越の食事ができるように、行って用意をしろ」と言って、ペテロとヨハネを遣わされた。

過越の祭りで主に行なわれることは、この食事です。小羊をほふり、それを食卓の真中において食事をします。この食事は、一つ一つ定められた順番があります。これをヘブル語でセダーと言います。その一つ一つが、イスラエルがどのようにしてエジプトから贖われたかを思い出すように設定されています。例えば、クラッカーのような種なしのパンの間に、ピンク色をしたわぎびのよう

なものをに入れて食べる場合があります。これは、イスラエルがれんがを集めていたときの、苦しみを思い出すものでした。また、ぶどう酒に指を浸して、その杯の下のところ10回振りかけます。これは、エジプトに下った十の災いを意味しました。こうして、神がイスラエルに対して、何をしてくださったのかを食事によって思い出すものだったのです。

そして、エルサレムでは、それぞれの巡礼者が食事を用意しています。ですから、混雑しています。その中で、食事ができるように、ペテロとヨハネに行って用意させます。

9 彼らがイエスに、「どこに用意しましょうか」と言うと、10 イエスは言われた。「いいですか。都に入ると、水がめを運んでいる人に会います。その人が入る家までついて行きなさい。11 そして、その家の主人に、『弟子たちと一緒に過越の食事をする客間はどこか、と先生があなたに言っております』と言いなさい。12 すると主人は、席が整っている二階の大広間を見せてくれます。そこに用意をしなさい。」13 彼らが行ってみると、イエスが言われたとおりであった。それで、彼らは過越の用意をした。

イエスは、注意して食事をとられるところを選ばれました。というのは、ユダがご自分を引き渡すのを狙っているからです。まず、「水がめを運んでいる人に会います」と言われます。ここの「人」は「男」であり、普通、水がめを運んでいるのは女ですから、目に付きます。そして、過越の食事をする客間がどこにあるかを尋ねますが、「先生があなたに言っております」と言わせます。つまり、この人は、イエス様の弟子の一人であるのでしょうか。それで、「席が整っている二階の大広間」を見せます。自分たちは客間でも、と思っていたところが、もっと上級な部屋を見せてくれました。このようにして、イスカリオテのユダが知らない所で食事の場を設けることによって、祭司長たちに通報できないようにされました。

3A 最後の食事 14-23

1B 身代わりの死 14-20

14 その時刻が来て、イエスは席に着かれ、使徒たちも一緒に座った。

「その時刻」とありますが、日没になると、この食事が始まります。そして、真夜中までにはこの食事は終わります。なぜなら、主が最後の災いを下される時、真夜中に、エジプト中の長子が殺されたからです。そして、「イエスは席に着かれ、使徒たちも一緒に座った。」とありますが、有名な、イエス様の最後の晩餐の絵画は間違っています。あれはレオナルド・ダビンチが描いたもので西欧化されています。その時は、コノ字にしたお膳みたいになっていました。私たちのお膳でご飯を食べるように、食べていたのです。さらに、彼らは過越の食事においては、左ひじを床につけて、横たわって食べました。横たわっているのは、奴隷状態から自由にされていることを示します。

15 イエスは彼らに言われた。「わたしは、苦しみを受ける前に、あなたがたと一緒にこの過越の食事をするのを、切に願っていました。16 あなたがたに言います。過越が神の国において成就するまで、わたしが過越の食事をするのは、決してありません。」

イエス様は、過越の祭の食事を弟子たちといっしょにできることを、とてもうれしがっておられます。これから、主はご自身が苦しみを受けられることを知っておられます。この時に、ご自身の愛を彼らに最後まで示したいと願っておられました。またイエス様ご自身が、彼らと共にいて、この親密な交わりを楽しみたいと思われました。これからの苦しみは、一言でいえば「切り離される」苦しみです。イエス様は、まず、イスカリオテのユダによって裏切られます。次に、弟子たちに見捨てられます。さらに、ユダヤ人の指導者たちの死刑判決によって、ユダヤ人の共同体から切り離されます。そして民衆から「十字架につけろ」と叫ばれて、民からも切り離されます。そして、正午になって、「神よ、神よ、なぜ私をお見捨てになったのですか？」として、父なる神ご自身から見捨てられるのです。その苦しみを前にして、最後の食事を、しかも記念すべき過越の食事をとれることをぜひ、したかったのです。

食事は、当時、互いに一つになることを示していましたが、過越の食事はさらに特別な意味を持ちます。イスラエルの救いを共有する交わりです。そして家族ごとに基本、行うものですが、家族の絆も深めます。だから、イエスは、いつも生活をともにしていた弟子たちとこの食事をするのができ、とても喜ばれたのです。イエス様は、悔い改める者がこのような食事の喜びにあずかれることを語っておられました。取税人ザアカイがそうでしたね、それからラオディキアの教会に対しても、共に食べる約束をしておられます(黙 3:20)。私たちは、このような食事をしたいですね。そして聖餐式は、まさにその食事であり、キリストにある食事です。

このイエスのことばから、キリストが再び来られて神の国が立てられたとき、私たちは過越の食事をするようになります。その時は、キリストによって救われた魂が、その救いを喜ぶだけでなく、万物が回復し、神の解放を楽しむことができます。「イザ 25:6 万軍の【主】は、この山の上で万民のために、脂の多い肉の宴会、良いぶどう酒の宴会、髓の多い脂身とよくこされたぶどう酒の宴会を開かれる。」

私たちもその時を待っていますが、イエス様は天に昇られ、神の右に着座し、万物がご自分の足元に置かれるまでそのようにしておられます。その時が来るまで、主は、かつてのナジル人のように、ぶどうから出るものを食することもなく、飲むこともないのです(民数 6 章)。私たち教会は、その主の日が来るまで、イエス様の最後の晩餐を覚えて、これを行いなさいと命じられています。「I コリ 11:26 あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。」私たちが、主が来られる日までこの地上で、主の死を告げ知らせる務めを担っていることを知って、そして聖餐にあずかります。私たちも同じように、キリストにあって苦しみを受

けるでしょう。けれども、同じようにその苦しみ後の栄光を期待することができるのです。

17 そしてイエスは杯を取り、感謝の祈りをささげてから言われた。「これを取り、互いの中で分けて飲みなさい。18 あなたがたに言います。今から神の国が来る時まで、わたしがぶどうの実からできた物を飲むことは、決してありません。」

食事、セダーには式次第があります。ハガダーと呼びます。順番にしたがって、儀式を取り行なっていくのです。初めにろうそくに点火し祈りを捧げます。父親が子供を祝福し、そして第一の杯が回されます。食事の中では、合計、四回、杯を交わします。第一の杯は「感謝の杯」と呼ばれます。第二は裁きの杯、第三は贖いの杯、そして第四は賛美の杯です。第一の杯の後に、水で指を洗いますが、この時にヨハネ福音書 13 章の、イエス様の足洗いがあったのでしょうか。そして第二の杯、裁きの杯を飲みます。これは、主がエジプトに裁きを行われたことを記念するものです。それから、苦菜を塩水に浸して食べるのですが、これはエジプトの奴隷生活で汗水を流した辛さを思い出すものです。イエス様が、ご自身を裏切る者がいると言われた時に、「マル 14:20 わたしと一緒に手に鉢を浸している者です。」これが、塩水に苦菜を浸す儀式の中で出て来るものです。そして、第三の杯、贖いの杯ですが、この時にイエス様がご自分の血が流される、新しい契約のための血であることを話されます。そして第四の杯は、最後に賛美をするための杯で、これを飲んで、ハレル詩篇と呼ばれる詩篇 113 から 118 篇までの歌を歌います。

ここ 17-18 節では、第一の感謝の杯の時に、主が「互いの中で分けて飲みなさい」と言われています。ここの「杯」は単数形になっています、つまりは、一つの杯を飲みかわすのです。一つの杯、一つのパンから預かると言うことが大事になります。「I コリ 10:16-17 私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか。パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから。」私たちは一つ一つの杯を用意してしまっていますが、本来は一つの杯であり、一つから飲み、一つから食べるということを意識します。

19 それからパンを取り、感謝の祈りをささげた後これを裂き、弟子たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられる、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」
20 食事の後、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新しい契約です。」

イエス様は、ご自分の苦しみを、弟子たちのためのものであることを明らかにされました。あなたがたのために与えられる、わたしのからだです、と。そして、あなたがたのために流される、わたしの血である、と。ここでイエス様は、過越の食事に新たな意味を付けられました。エジプトを脱出する時に食べる種なしパンと、飲む杯は、ご自分のからだと血を意味しているのだということです。彼

らは子羊が屠られてその血を家の鴨居と門柱に付けましたが、イエス様がそれをご自分の流される血とされました。そして、そこで食べるパンは、鞭打たれて、裂かれるからだとされました。弟子たちにとっては、イエス様の苦しみと死は、全くそのような意味を持っているとは知るよしもなく、ただただ、打ちのめされて、恥じ入るだけのものでしたが、神は、そうは全く考えておられませんでした。終わりの日、ユダヤ人たちが再臨の主に見える時に、実に自分たちの為であるという告白をします。「イザ 53:4-5 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った。それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた。」

イエス様が弟子たちに与えられたのは、「アフィコーメン」と呼ばれるパンです。三つの部分に分かれた布袋に、それぞれ三枚の種なしパンを入れます。そして真ん中のパンを引き出し、それを二つに裂きます。その半分を麻布にくるんで隠します。そして子羊の肉の食事の後に、それを持ち出して食べるのですが、そこでイエス様は「あなたがたのために与えられる、わたしのからだです」と言われました。三つのパンは、父、子、聖霊を表しています。その真ん中、御子のパンだけが裂かれます。そして、麻布にくるむのは、イエス様が裂かれて死なれてから、墓に葬られる姿です。イエス様が三位一体の神から引き裂かれて、その痛みをもって肉体の傷を受けられたことがよく分かります。それは私たちが、罪によって神に対して傷を持ち、その関係が裂けているのを、イエス様の受けられた打ち傷によって、癒されるためです。

そして、杯ですが、先ほど話したように贖いの杯です。これをイエス様は、「わたしの血による、新しい契約」と言われました。イスラエルが、石の板に書き記されている神の律法に従って生きている契約、つまりモーセによって与えられた契約は、彼らの不従順によって破られました。そのことが如実に現れたのが、エレミヤの時代、ユダ王国が神に背いてバビロンに滅ぼされる時です。しかし主は、彼らの不従順にも拘らず、ご自身の真実によって新しい契約を彼らと結ぶと約束されていました。そして、そこには罪の赦しの約束が含まれているのです。「エレ 31:3b わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」

契約というのは、印が伴います。確かに神とその契約を結んでいるという確認の印です。ノアとの契約の印は、虹でした。アブラハムとの契約の印は割礼でした。モーセとの契約の印は、安息日でした。ダビデとの契約もありましたが、その印は処女降誕でした。このように、はっきりと神が契約を結ばれたことを印で見せてくださいます。そして、神は新しい契約の印が、キリストの流される血そのものにしてくださったのです。このことによって、これまで血は流されていましたが、動物の血であり、それによっては罪と恥は覆われていましたが、取り除かれていませんでした。今、キリストが流された血によって、私たちは良心が清められ、根こそぎ罪が取り除かれたのです。

2B 親しい仲の裏切り 21-23

21 しかし見なさい。わたしを裏切る者の手が、わたしとともに食卓の上にあります。22 人の子は、定められたとおりに去って行きます。しかし、人の子を裏切るその人はわざわざです。」

イエスにあって一つとなっていた弟子たちです。親しい食事を囲んだ交わりです。そこに、混乱させ、散り散りにさせる者が出てきました。イスカリオテのユダの裏切りです。私たちは聖書で、そうやって神の家を混乱させる裏切りの罪を見ます。ヨシュアがイスラエルを率いて、カナンを攻めていた時、聖絶のものに手を触れたアカンの罪があります。彼のせいで、次の町、アイを攻略できるところができず、戦死者を出してしまいました。

そして、ダビデが王の時に、息子アブサロムがいます。息子が王に反抗したことは大きな痛手ですが、王に側近がアブサロムについて、その傷を大きく広げました。アヒトフェルです。ダビデは彼のことを思って、このように歌いました。「詩 41:9 私が信頼した親しい友が私のパンを食べている者までが私に向かってかかとを上げます。」信頼している親しい友のことを、「私のパンを食べている者」と言っています。パンを食べる仲であったのに、その中に裏切ったということです。このダビデの嘆きは、キリストの預言になっていました。イエス様ご自身が、食事の時に裏切られる体験を受けられるからです。

ここでイエス様は、ユダに警告されています。人の子が死ぬことは、これは父なる神が定められたことです。全人類の罪のために、その贖いのためにイエス様は死んでくださいます。しかし、そのことがこの裏切りを祝福することにはならないのです。主はこの裏切りをも用いて、永遠の救いの計画を立てておられますが、その裏切り自体は呪われるべきものです。善に変えられるからといって、その悪が罰せられないということない、ということです。

23 そこで弟子たちは、自分たちのうちのだれが、そんなことをしようとしているのかと、互いに議論をし始めた。

興味深いことに、この時点で、11 人の弟子はユダが裏切ることをわかりませんでした。むしろ、自分が裏切るのではないかと考えました。弟子であっても、それぞれが弱さを持っています。そのことは薄々分かりながら、いや、分かっているからこそ、他人に指を差し、「お前が裏切るのではないか？」と言い合っていたことでしょう。「ロマ 2:15 彼らは、律法の命じる行いが自分の心に記されていることを示しています。彼らの良心も証ししていて、彼らの心の思いは互いに責め合ったり、また弁明し合ったりさえするのです。」しかし、彼らは裏切るかもしれないと思っていたかもしれないけれども、それ以上に、イエス様の愛と選びがあるので、彼らはイエス様を見捨てても、それでも、立ち直ることができました。そして、彼らは再び、罪を赦されるイエス様にあって一つになっていきます。

裏切りのユダは、自害していなくなりましたが、けれども、厳しいことですが、滅びなければならぬ人でした。悔い改めない罪は、共同体から、会衆から、そして教会から取り除かれなければいけません。私たちが勇気をもって取り除くこともあります、それ以上に、主ご自身が取り除いてくださいます。そして、キリストの裂かれた肉と流される血によって、私たちは一つにされ、主が戻って来られるまで、その親しい交わりを清く保っていく使命を受けています。